

## ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	体育の授業において児童をみる教師の観察について
Author(s)	野田, 洋平 / 小更, 昭 / 生板小学校体育研究部 / 野田, 文子 / 吉沼, 充 / 檜村, いずみ
Citation	茨城大学教育実践研究(8): 67-79
Issue Date	1989
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10109/12185">http://hdl.handle.net/10109/12185</a>
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係  
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiwase/toiwase.html>

## 体育の授業において児童をみる教師の観察について

野田洋平\*・小更 昭\*\*・生板小学校体育研究部\*\*・野田文子\*\*\*・

吉沼 充\*\*\*\*・樫村いずみ\*\*\*\*

(1989年3月31日受理)

A Factor Analytical Study on Teacher's Observations of  
Physical Education in Elementary School Pupils

Yohei NODA, Akira KOBUKE, MANAITASHO TAIKUKENKYUBU  
Fumiko NODA, Mitsuru YOSHINUMA and Izumi KASHIMURA

キー・ワード：学校体育研究，因子分析，因子負荷量，貢献度，因子構造

生板小学校が62年10月，体育研究授業を行なった。年度始めの4月から準備に入り6ヶ月の自己研修，校内研修，他校視察や予行発表等の手順を踏み当日を迎えた。

本研究は，準備に入った4月と発表終了直後に視点をあて，教師が児童をどのように観察しているか，その観察が事前と事後では相異なるのかを検討することにした。全校生徒を対象に，教師が各項目を5段階で評価し，その結果を因子分析した。

その結果から次のような知見をえた

1) 事前調査では，低学年担当の教師が，児童の体力・運動能力・技能とその習得意欲，校舎内外での身体活動と体育行事への参加，生活習慣と協和，登校時の気分と行動の積極性，授業への出席と行事参加。高学年では，体力・運動能力・技能への達成意欲と頑張り，授業への出席意欲と参加気分とケガ回避，運動仲間と遊び行動を中心に観察している。

2) 事後調査では，低学年担当教師が，体力・運動能力・技能の獲得意欲と体育や身体活動への参加，学校への登校時の気分と出席，生活習慣と姿勢と協和。高学年では，体力・運動能力・技能レベルと遊びや行事への参加意欲，登校時の気分と仲間との遊び，基本的な生活習慣と登校時の様子やケガ，友達や教師との協和と外見性などをよくみている。

3) 事前では，貢献量からみて観察点が分散していたのに比べ，事後調査では，低・高学年ともに第I因子の高い運動能力・スキルと獲得意欲を中核とする身体活動への参加が児童の活動を鮮明に説明できる要素と言える。

\* 茨城大学教育学部      \*\* 稲敷郡河内村立生板小学校      \*\*\* 茨城女子短期大学

\*\*\*\* 茨城大学教育学部教育研究科

## はじめに

昭和42年以来、20年に亘る体育研究を続けている生板小学校は、その研究の歴史の中で、河内村、稲敷郡、茨城県の研究指定を受け、体操教材を主体にした授業研究、学級経営を中核にすえた体育の授業の追求、楽しさと喜びを高める授業の工夫、目標とする生板小学校の児童像に体育の授業でどうせまっていくななどの課題を丁寧にかも創意工夫にあふれた方法論で解決してきた。

これまでの諸研究の成果をより高めるために、一つには、親からみた子どもの体力・運動能力・スキル・意欲・欲求・信念・動機、いろいろな環境条件、健康状況の変化、二つには、教師からみた子どもの変化（主に身体活動にかかわる条件）を把握しようとした。授業研究に入る前と終了した後の同項目による二回の調査で、子どもの変化相をとらえ、本年度の体育研究の主題「学級経営に生かす体育の授業研究」をどのように達成しているかをみようとしたのである。

本研究では、二つの調査のうち、教師側からの観察を取り上げ、教師が児童のどのような活動をどう評価しているかを30項目について調べ、その結果を因子分析（バリマックス法）する。低学年と高学年の二群間の因子の構造の差異を、研究当初と研究後の2回の調査から明らかにし、教師の児童をみるポイントの変化をとらえることをねらいとする。

## 研究方法及び対象

- 1 対象：河内村立生板小学校 教師 9名 低学年 男61名 女63名 高学年 男73名 女53名
- 2 方法：質問紙によるアンケート調査、教師が自分の学級の児童の諸活動について5段階評価。  
：結果を因子分析（主因子法、バリマックス法）する。
- 3 内容：登校時の状況、生活習慣、運動能力・運動、授業・行事への参加、技能の獲得、競争意欲、友達・教師との関係、施設利用やクラブ所属、怪我・給食など30項目。

## 結果と考察

### 1 主因子法による回転前の因子負荷量

表1は、研究当初の調査（プリテスト…PRと略）、研究後の調査（ポストテスト…POと略）を主因子法により求めた因子負荷量を示している。この第I因子は、全分散に対して最大の貢献量をもつように全変量によって定義されていることから、各変量に共通な因子であると言える。このことから言えば、PR、POの両テストともに低学年、全体の両群は、ほとんど同じ構造をもっている。しかし、高学年は、PRで授業への参加態度、気持を高く評価しているのに、POでは、登校時の元気度に視点が向いているだけであり、遅刻・欠席・気分の良さあしについては、負荷量が低くなっている。それは、その辺りの児童側の態度が改善されていることと考えることもできる。低・高学年では、登校過程の様子に負荷量の差がみとめられる。このことが構造上の差異である。貢献量を

表1 回転前の第1因子

	事前調査			事後調査		
	低学年	高学年	全学年	低学年	高学年	全学年
病気で遅刻・欠席をしない	.2788	.6438	.4186	.3425	.4446	.3899
朝起きが悪くてあわてて登校することはない	.2671	.6241	.3811	.3517	.4727	.3987
登校したとき気分がすぐれている	.3188	.6684	.4710	.3359	.4659	.3615
基本的な生活習慣が身につけている	.3420	.1015	.2181	.2846	.1945	.2550
登校したとき元気である	.2981	.6984	.4608	.4323	.5438	.4695
運動能力・体力に自信がある	.6747	.6352	.6665	.8480	.8668	.8527
運動の後疲れやすくない	.7717	.8288	.7851	.7449	.8079	.7515
運動であと一息をがんばれる	.8038	.7364	.7787	.8285	.8167	.8246
休み時間には教室外に出てよく遊ぶ	.8060	.7947	.7486	.8050	.6619	.7181
体育・運動を大好きである	.7774	.7928	.7817	.8476	.8525	.8466
体育行事に進んで参加する	.7216	.7904	.7296	.7066	.7848	.7290
友達と仲良く運動や遊びをする	.7029	.5766	.6263	.7601	.5890	.6745
体育の授業に意欲がある	.7450	.8244	.7796	.8435	.8139	.8218
得意な運動や技能を持っている	.5442	.5722	.5378	.6747	.7593	.6839
運動する友達が多い	.7462	.7558	.7456	.7456	.7176	.7307
体育の時間になると目が輝く	.7732	.7458	.7251	.8441	.7306	.7730
運動技能の獲得に意欲的である	.8077	.8365	.8126	.8066	.8591	.8272
運動技能がレベルに達している	.7758	.5965	.7006	.7808	.7470	.7621
運動意欲が高い	.5407	.7933	.6753	.7716	.8075	.7858
得意でない運動には消極的である	-.5814	-.4219	-.5030	-.3220	-.4381	-.3754
姿勢がよい	.2935	.1499	.2272	.3685	.0583	.2358
運動施設や用具をよく利用する	.6623	.5083	.5049	.6248	.5802	.6008
運動クラブに達している	.1256	.2252	.1934	.0571	.4081	.1280
競技会などで自分の力以上のものを出す	.6423	.6170	.6360	.1858	.6070	.2575
友達と協力できる	.4754	.3488	.4069	.4469	.1058	.3368
教師の言うことをよく聞く	.4036	.4897	.4205	.3881	.3530	.3781
行動がエネルギーギッシュである	.7259	.6380	.7002	.7243	.7035	.7129
積極的である	.6181	.5078	.5800	.5609	.4924	.5316
運動でケガをすることはない	-.1913	.6278	.1703	-.2197	.3597	.0301
給食をよく食べる	.2744	.4017	.3398	.1954	.3352	.2515
固 有 値	10.675	11.890	10.465	11.259	11.588	10.826
貢 献 度 I (%)	35.58	39.63	34.88	37.53	38.62	36.08
貢 献 度 II (%)	55.23	56.23	57.06	60.08	62.88	62.38

	5%水準	1%水準	0.1%水準
低学年 (N=123)	r  = .1754	r  = .2278	r  = .2866
高学年 (N=127)	r  = .1726	r  = .2245	r  = .2823
全学年 (N=250)	r  = .1235	r  = .1614	r  = .2045

表2 事前調査・低学年

	I	II	III	IV	V
運動能力・体力に自信がある	.8559				
体育の授業に意欲がある	.8207				
運動の後つかれやすくない	.7898				
運動技能がレベルに達している	.7605				
運動技能の獲得に意欲的である	.7528				
運動であと一息がんばれる	.7255				
競技会などで自分の力以上のものを出す	.5939				
得意な運動や技能をもっている	.5318				
運動する友達が多い	.5118				
体育の時間になると目が輝く		-.7865			
運動でケガをすることはない		.7842			
休み時間には教室外にでてよく遊ぶ		-.7677			
運動施設や用具をよく利用する		-.7010			
体育行事に進んで参加する		-.6759			
体育・運動が大好きである		-.6000			
基本的な生活習慣が身についている			.8603		
友達と協力できる			.8244		
教師の言うことをよく聞く			.8097		
姿勢がよい			.6267		
登校したとき元気がある				.7124	
登校したとき気分がすぐれている				.7032	
積極的である				.4983	
行動がエネルギッシュである				.4675	
朝起きが悪くてあわてて登校することはない					.4850
固 有 値	6.2606	4.5873	3.0780	1.9751	1.7768
貢 献 度 I (%)	20.39	15.29	10.26	6.58	5.92
貢 献 度 II (%)	32.39	23.73	15.92	10.22	9.19

	5 % 水準	1 % 水準	0.1 % 水準
低学年 (N=123)	r  = .1754	r  = .2278	r  = .2866

表3 事後調査・低学年

	I	II	III	IV	V
体育の時間になると目が輝く	.8892				
運動意欲が高い	.8662				
運動能力・体力に自信がある	.8515				
運動技能の獲得に意欲的である	.8496				
運動であと一息をがんばれる	.8399				
運動の後疲れやすくない	.7851				
運動技能がレベルに達している	.7794				
運動する友達が多い	.7215				
体育の授業に意欲がある	.6949				
行動がエネルギーギッシュである	.6949				
得意な運動や技能を持っている	.6893				
体育・運動を大好きである	.6889				
運動施設や用具をよく利用する	.6286				
休み時間には教室外に出てよく遊ぶ	.5971				
体育行事に進んで参加する	.5310				
友達と仲良く運動や遊びをする	.5260				
積極的である	.5174				
登校したとき気分がすぐれている		.7798			
登校したとき元気である		.6737			
朝起きが悪くてあわてて登校することはない		.5842			
病気で遅刻・欠席をしない		.5351			
教師の言うことをよく聞く			.7654		
基本的な生活習慣が身についている			.6632		
友達と協力できる			.6496		
運動でケガをすることはない				.6836	
競技会などで自分の力以上のものを出す					.7275
固 有 値	9.4247	3.4116	2.6394	1.3980	1.8671
貢 献 度 I (%)	31.41	11.37	8.79	4.66	6.22
貢 献 度 II (%)	50.28	18.20	14.08	7.45	9.96

	5 % 水準	1 % 水準	0.1 % 水準
低学年 (N=123)	r  = .1754	r  = .2278	r  = .2866

みるとPRよりPOに高く、両テストともに児童の諸活動要素をかなり鮮明に説明できる。そして、低学年より高学年にその傾向がつよい。これらの因子を基本的児童観察因子とする。

## 2 バリマックス回転後の因子負荷量と解釈

バリマックス法は、変量間の異質性を前提として、出来るだけはっきりといくつかのグループに分けようとする方法であり、事前と事後、低学年と高学年の異質性を明らかにできる。因子の命名と解釈にあたっては、因子負荷量の目安を0.45とし、各5因子を抽出した。

### イ 低学年の場合(表2, 表3)

事前テスト(PR)では、第I因子から第5因子までを負荷量にてらして次のように命名した。第I因子: 主体的要因の因子(体力・運動能力・技能の力量水準と授業、行事への参加態度), 第II因子: 負の身体活動因子(遊び・体育授業・行事への消極的参加態度), 第III因子: 基本的生活習慣と協調性の因子(基本的生活習慣, よい姿勢と友達・教師との協調性), 第IV因子: 積極的な登校因子(登校時のよい気分と元気さ, 行動の積極性), 第V因子: 解釈不可能。

事後テスト(PO)では、第I因子: 主体的要因の因子(体力・運動能力・技能の力量水準と習得意欲, 競争意欲・ガンバリ意欲・授業への参加意欲, エネルギッシュ, 友達), 第II因子: 登校時の様子因子(遅刻・欠席・起床の様子, 登校時の気分・元気さ), 第III因子: 基本的生活習慣と協調性の因子(生活習慣とよい姿勢, 友達・教師との協調性), 第IV, 第V因子は解釈不可能。

PR, POの両調査からみると、低学年担当教師の児童への観察がPOの方が集約していると言える。更にPRでの第II因子が身体活動の因子であり、活動の消極的な側面をみている。この因子は貢献度も高く、研究に入る直前での注意がマイナス行動や意欲を詳細にみ届けていることに特徴がある。この因子はPOでは認められない。POでは、第I因子は、PRと構造がまったく同じであり、貢献度もPRよりは高くなっている。したがって、教師は事前より事後の方で、この主体的な要因に観察の主眼をおいていると言うことができる。第II因子が登校前の様子だけの因子構造であり、事前で、少し散慢的であった観察が、家庭-学校という学校への過程を問題にしている点が事前・事後の大きな相違点である。第III因子はPR, POともに同項目であり、負荷量は、PRが大きい。したがって貢献度も高い。

### ロ 高学年の場合(表4, 表5)

PRの第I因子は、主体的要因の因子(体力・運動能力・技能の力量水準, 頑張り, 行事への参加, 行動のエネルギーと力の発揮, 活動好き), 第II因子: 登校状態と活動への期待意欲の因子(出席状況・気分・元気さ, 技能獲得, 競争意欲, 体育への期待感, 活動の安全さ), 第III因子: 積極的な活動因子(友達との遊び行動・合い間の遊び, 友達の数), 第IV, 第V因子は解釈不可能。

POの第I因子: 主体的要因の因子(体力・運動能力・技能の力量水準と体育や行事への好き, 期待, 参加, 競争意欲, 行動の積極性), 第II因子: 登校時の状況と仲間との協調性の因子(登校時の気分, 元気さと友達との遊び活動への積極さ), 第III因子: 基本的生活習慣と安全さの因子(朝の起床状況, 生活習慣, 運動時のケガ), 第IV因子: 協調性と姿勢の因子(友達・教師との協調性, よい姿勢), 第V因子は解釈不可能。

表4 事前調査・高学年

	I	II	III	IV	V
運動能力・体力に自信がある	.8925				
運動技能がレベルに達している	.8524				
運動であと一息をがんばれる	.7283				
運動の後疲れやすくない	.6692				
得意な運動や技能を持っている	.6284				
体育・運動を大好きである	.6152				
体育行事に進んで参加する	.6031				
行動がエネルギッシュである	.5669				
競技会などで自分の力以上のものを出す	.5436				
朝起きが悪くてあわてて登校することはない		.8741			
登校したとき気分がすぐれている		.8129			
運動でケガをすることはない		.7590			
登校したとき元気である		.7549			
体育の時間になると目が輝く		.7385			
病気で遅刻・欠席をしない		.6396			
運動技能の獲得に意欲的である		.5941			
運動意欲が高い		.5655			
友達と仲良く運動や遊びをする			.7824		
休み時間には教室外に出てよく遊ぶ			.6341		
運動する友達が多い			.4900		
基本的な生活習慣が身についている				.6706	
姿勢がよい				.6624	
得意でない運動には消極的である					.6603
固 有 値	5.6629	5.6952	2.0962	1.3583	1.7201
貢 献 度 I (%)	18.87	18.98	9.87	4.52	5.73
貢 献 度 II (%)	26.78	26.94	9.91	6.42	8.14

	5 % 水準	1 % 水準	0.1 % 水準
高学年 (N=127)	r  = .1726	r  = .2245	r  = .2823

表 5 事後調査・高学年

	I	II	III	IV	V
体育・運動を大好きである	.8601				
運動能力・体力に自信がある	.8181				
体育行事に進んで参加する	.8114				
運動技能の獲得に意欲的である	.7936				
運動であと一息をがんばれる	.7603				
運動意欲が高い	.7545				
体育の授業に意欲がある	.7413				
得意な運動や技能を持っている	.7379				
運動技能がレベルに達している	.7093				
体育の時間になると目が輝く	.7091				
運動する友達が多い	.6903				
運動の後疲れやすすくない	.6584				
行動がエネルギッシュである	.6179				
休み時間には教室外に出てよく遊ぶ	.6105				
競技会などで自分の力以上のものを出す	.5071				
登校したとき元気でである		.8794			
登校したとき気分がすぐれている		.8561			
友達と仲良く運動や遊びをする		.7829			
朝起きが悪くてあわてて登校することはない			.6481		
基本的な生活習慣が身についている			.6435		
運動でケガをすることはない			.5849		
友達と協力できる				.6792	
姿勢がよい				.5470	
教師の言うことをよく聞く				.5333	
積極的である					.6684
固 有 値	9.0913	3.5333	2.0813	1.6502	2.0717
貢 献 度 I (%)	30.30	11.77	6.93	5.50	6.90
貢 献 度 II (%)	49.33	19.17	11.29	8.95	11.24

	5 % 水準	1 % 水準	0.1 % 水準
高学年 (N=127)	r  = .1726	r  = .2245	r  = .2823

PRでは、第Ⅰ、第Ⅱ因子で貢献度が同程度であり、教師が比較的広角度の観察をしていることがうかがわれる。そしてその中でも高い負荷量を示した項目は、体力・運動能力・技能レベルに関するものであり、起床の状態、登校時のよい気分や元気さ、体育への輝き、怪我のない運動、仲間との協調的な遊び、生活習慣などの諸点である。

POでは、第Ⅰ因子にきわめて高い負荷量をもつ項目が体育・運動への心構え（好き・輝き）、行事への積極的参加、体力・運動能力・技能の自信とレベル、向上しようとする意欲、運動の仲間などの諸項目である。そしてこれらの項目を含む因子が一つの因子にグルーピングされ、きわめて高い貢献度をもっている。

PRで2つの因子に分散的に構造化されていた同じような貢献度をもつ因子が、POでは、一つの因子に集約されきわめて高い貢献度を示す。他の因子は単純な構造に鮮明化された。

#### ハ 低学年から高学年までを総体的にみる場合（表は略）

かなりマクロな視点ではあるが、1年から6年までを観察するポイントをさぐるため、また共通項目をリサーチすることをねらいにして因子分析してみた。

PRでは、第Ⅰ因子：主体的要因の因子（すぐれた体力・運動能力・技能と体育への意欲的とりくみ方）、第Ⅱ因子：体育授業や授業外活動の因子－負の方向（授業へのとりくみ、教室外での活動、施設の利用、運動仲間、不得意種目への消極的参加）、第Ⅲ因子：生活習慣と友達・教師との協調性の因子（基本的生活習慣、教師への服従、友達との協力）、第Ⅳ、第Ⅴ因子は解釈不可能。

POでは、第Ⅰ因子：主体的要因の因子（すぐれた水準の体力・運動能力・技能のレベル、それらを習得する意欲・態度、積極性、エネルギー）、第Ⅱ因子：基本的生活習慣と友達・教師との協調の因子（生活習慣を身につけている、教師への服従と友達との協力）、第Ⅲ因子：登校前後の気持の因子（登校時のよい気分、元気さ、友達とのたのしい活動）、第Ⅳ、第Ⅴ因子解釈不可能。

PRでの各因子の貢献度をみると、全分散に対して18%あるのが第Ⅰ因子、第Ⅱ因子は13%、第Ⅲ因子が8%である。POでは、第Ⅰ因子が31%、第Ⅱ因子8%、第Ⅲ因子が11%である。これらを見る限りでは、PRで少し散漫に見ていたものが、POでは、広角的にしかも密度の濃い観察が行なわれていたとみることができる。そしてPOの第Ⅰ～第Ⅲの因子で50%の貢献量をもとめることができる。したがって全学年を通してPRとPOでは、観察の広さ、深さで後者の方がすぐれた集約性をもっていることが読みとれる。

#### ニ モデルや研究結果との検討

図1は、内山の「遊び・運動行動の成立要因・条件に関する概念図式」<sup>1)</sup>である。遊びや運動行動のスル、シナイをHostの条件としての(A)、(B)、価値システムとしての主体の心身・健康状態(C)、客観的存在としての環境(D)、これらA、B、C、Dをまとめて生態学的関連で行動をとらえようとしているモデルである。

このモデルと本研究での調査項目が特に関連し、代表する整合性があるかどうかの検討は行なわれていない。しかし、少ない項目の中で、AからDまでにわたる項目の選定作業は考慮している。

教師は、四つのカテゴリーを予め知識として特に学習はしていない。

教師の観察の中心的ポイントは、主体(A、B)に関わる項目である。

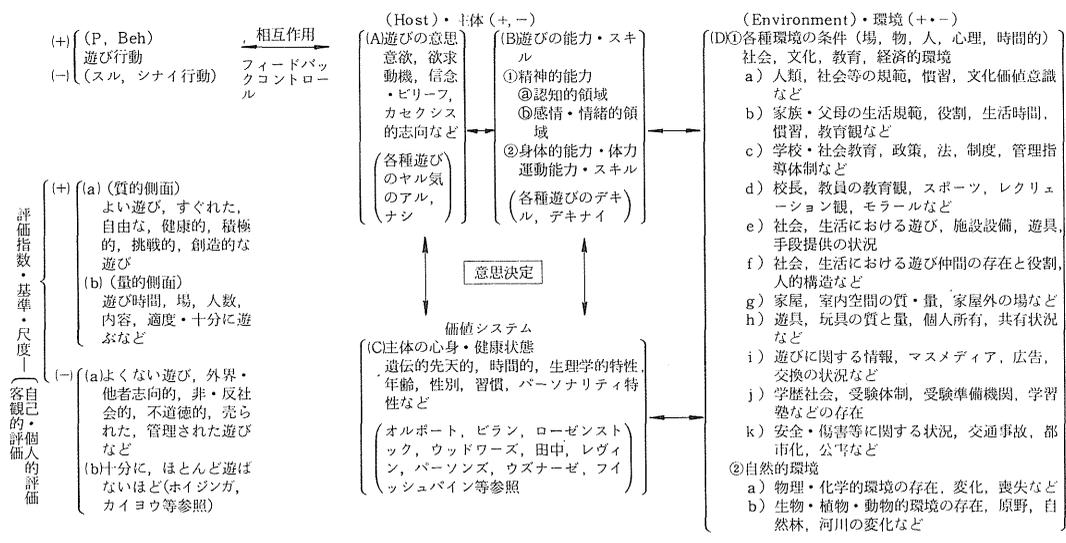


図 1 遊び・運動行動の成立要因・条件に関する概念図式

注：このモデルの大枠は各種保健行動, 安全行動, 性行動, スポーツ運動, 教育等の記述, 説明にも適用できる。望ましい行動がみられない場合, 学校教育指導として(A), (B), (C), (D)要因のうち, どこまで, どのように関与できるか, すべきか, しているか, いないか, か問われなくてはならない。通常の教育活動としては, 第一次的, あるいは直接的に(B)-①, ②の育成に関与していることになる。また, 幾つかの行動モデル, ヘルスブリーフモデルなどの関連が当然考えられるが, ここでは個人の枠・信念などのほかに, 客観的存在としての環境があり, 生態学的関連で行動をとらえようとしている。

低学年担当の教師は, PRからみると体力・運動能力・技能の良し悪しや習得への意欲, 授業への態度や意欲などストレートな視点であったのに対し, POからみると, 上記の事柄とそれらを支える条件, すなわち体育の時間になると目の輝き, 競争意欲とか, 運動施設等の利用, エネルギッシュな行動などにも同時に目をむけていることになり, 観点の広さと深さが感じられる。そしてなお, 貢献度が高いことから, POの時点の方がこれを重要視していることも認められる。

PRの第II因子では, 主体の条件と環境(D)の条件が同一因子の中にあられている(負の方向)。主体の意欲や知識がマイナス方向にむいているかどうかを運動施設の利用や教室外での遊び行動を通してみていることになる。勿論, 怪我のチェックもなされている。POではこの因子はみとめられない。また, PRとPO両側からみても(D)の条件としての友達・教師との人間関係は観察の重要な柱であり, 貢献度もかわりがなく, いつでもよく観察されている内容といえる。そしてこの人間関係は基本的な生活習慣とのかかわりの中で, 姿勢などの外見性を見ながら観察されていると推察される。POも同様である。PRでの(C)に関する項目では, 登校時の気分や元気さ, 行動のエネルギッシュで観察されていて, 登校時という目に見える部分に限られているのに, 体育の研究が進むと, 朝起き, 病気などが同一因子の中にみられ, 登校時の様子の一步前を気にしている観察の濃さがみとめられる。

高学年担当教師についてみると, PRでは, 主体の体力・運動能力・技能・意欲をストレートにみている。それらのパフォーマンスの高低を問題にしているようにも思えるが, POでは, 体力, 運動能力, 技能, 意欲の出来高は勿論, それを獲得し習熟していく過程にも観察の目をむけている

と思われる。そしてPOでは、それらが観察の主力である。PRでは、健康状況と主体の要因が同程度の観察ウェイトであるのに対し、POでは、主体にウェイトが傾斜している（全分散に対して約50%の貢献度、PRでは19%である）。

健康状況（C）は、PRでは、意欲・動機と登校時、朝起きの状態や怪我が同じ因子にあらわれ約19%の貢献を示しているのに、POでは、登校時の様子と友達との遊び行動、基本的生活習慣と朝起き、怪我がそれぞれ別の因子にあらわれる。このことは、PRでは未分化な観点だったものが友達との遊び活動と登校時のすぐれた気分と元気を、朝起きと生活習慣と怪我を同一次元でみるように統一され分化されてくる。それだけ観察視点が焦点化し、求心的になっていると考えられる。PRでは基本的生活習慣に目がとどいていなかった（因子命名・解釈が出来なかった）のに、POでは、本来の生活習慣、すなわち、児童の登・下校の裏側を洞察していると考えられる。

環境要因（D）については、PRで友達・教師との協調的人間関係は観察のポイントにならなかったが、友達同志との遊び行動、友達の数など児童の仲間同志との関係と行動にポイントになっている。POでは、友達と教師の協調性が同一因子にみとめられ、教師の言うことをよく聞けるかどうか、友達と協力できるかどうか態度としての外見性の姿勢を通して観察されているという点がPRとことなる点である。

モデルに関して検討をすすめてみたが、本研究会の前・後では、教師の観察のポイントがきわめて変化していることが以上からみとめられた。すなわち、前では、各領域に含まれる項目が混在し、かなり広角的ではあるが、分散的であったあった観察が、後では、統一的、分化されきわめて中心的な視点にかわっていると言える。その中でも主体にかかわる観察ポイント（A、B）で体育学習行動のスル、シナイを感知していると推察された。

高田<sup>2)</sup>は、よい授業の条件として次の四項をあげた。(1) せいっぱい運動させてくれた授業、(2) ワザや力を伸ばしてくれた授業、(3) 友人と仲よく学習させてくれた授業、(4) 何かを新しく発見させてくれた授業の四つである。この四条件と調査結果を重ねてみると、(イ) せいっぱいの運動をみているか、(ロ) ワザや力の伸びをみとめているか、(ハ) 友人と仲よく学習していることをみているか、(ニ) 何か新しい発見をしたかどうかにかががついているかと言いかえることが出来る。あと一息の運動へのガンバリ、自分の力を発揮する、よく遊ぶなど活動的な面は、せいっぱいさを示し、技能に関するレベル、意欲、得意な技能などにも高い負荷量のみとめられ、このことは、ワザの伸びをみとめている。遊ぶ仲良い友達、運動する友達、友達との協力などは友人との仲よい学習場面の構成になくしてはならない要因として観察していると言えよう。必ずしもこの四条件に整合させるような項目構成をしていないので、詳細については分析できないが、生板小の教師がPR、POを問わず、この観点をもち続けていることが示唆される。特に、本調査項目のうち、運動能力・技能とその獲得への過程や意欲・動機についてきわめて深い洞察をしていることもみとめられ、よい授業の基本的条件を具有し実践している姿勢が研究の中で高められていると考えられる。

また、本調査の中で「姿勢がよい」という項目に、高い負荷量のみとめられ、一匹狼的な項目かどうかの判断に戸惑ったが、斉藤喜博の姿勢の指導を小林<sup>3)</sup>は、姿勢の教育とは、柔道などという自然体の指導であり、緊張して立つのではなく、脱力して立つ——腰を伸ばし、のびやかに立つ——ことを指導することであるとしている。先の「姿勢がよい」をこのようにとらえて、授業を通じて、姿勢に目を届かせているとすれば、体育の授業の根本にかかわる課題を見つめていると言うことが

出来よう。

小林<sup>4)</sup>は、よい授業の道すじを「自主的・創造的な集団活動」をベースにして「積極的な学習意欲」が育ち、それが「ひたむきな活動」を生み、その活動が「技や力の伸び」に結びつくときほんとうの「よろこび」が生まれ、そのような授業は「思い出に残る授業」となるとした。

これは、体育に対する児童の態度分析の結果を、体育の授業に対する子どもたちの態度は、「体育授業の場でのよろこびの感情」「授業内容に対する評価」「体育授業に対する価値感」の三つの要素により構成され、「よろこび」から評価が生まれ、そして「価値感」が育つというモデルを提示した。このモデルに整合するしないは別として、登校時の元気さ、気分のよさ、行事への積極的参加、よく遊ぶ、友達と遊ぶ、協力、エネルギー、怪我をしないなど、「よろこび」に通ずる諸要因に高い負荷量と貢献度が認められ、「よろこび」を育てる方向への授業者としての姿をみる思いがする。

シーデントップ<sup>5)</sup>は、効果的な教授のための方略として、クーニンの概念を紹介している。(1) 状況理解、(2) 同時的処理、(3) スムーズな展開、(4) 勢いの保持、(5) 集団への目配り、(6) 生徒の責務の六項目である。その中で、教師は生徒の行っていることをいつもわかっている(状況理解)、2つの問題を、同時に効果的に扱うことができる(同時的処理)教師がすべての子どもを課題につかせ活発に活動させることができる(集団への目配り)は、本研究でも、生板小教師集団がかなり広角的に深く認識している諸項と考えることができる。とくに状況理解が登校過程をも含めている点に特徴があり、その状況を友人との行動を通して観察していると思われる。集団への目配りは、登校前後と授業中、休み時間にまで及び 体育の授業がただ単に 授業中の問題だけにとどまっていなかったことを示していると言える。

著者ら<sup>6)</sup>は、これまでの研究の中で、本県児童生徒の体力・運動能力の発達とそれにかかわる諸条件を検討し、内山<sup>7)</sup>の提唱した生態学的方向からの研究視点が不在であると、体力・運動能力の低下・停滞傾向を把握できないこと、このモデルがパフォーマンスモデルでなく、成立要因、条件の主体と環境と価値システムの中で構造化され、その構造が成立したところに自己概念の形成が行なわれること、自己概念が生態学的方向から認識され、改善する力にならないと少なくとも体力・運動能力の発達が即物的になる危険性があること、その意味で、よい生活習慣の形成と把握が必要であることを指摘した。そこからみるとPOで基本的生活習慣が高学年で、怪我や朝起きの状態とのからみで同一因子に構造化され、PRでは、病気、登校前後の様子、怪我と結びついていないことを考えると、生活習慣というとらえ方が狭い範囲にとどまっているのではないか(生活習慣の中味がこの調査項目では明確化されていないということもあるが)という危惧もある。低学年では、生活習慣が友達との協力や教師との関連でグルーピングされていることもその証左であると考えられる。このことについては、より具体的に調査する必要がある。

## ま と め

これまでの検討から次のような知見をえた。

1) 研究授業の前と終了後では、教師の観察は広角的、未分化であった「目」が統一的、分化さ

れ、観察のポイントは研究授業のトレーニングが進むにつれ改善されている。

- 2) 低学年担当教師と高学年担当教師の観察は、本質的にかわってはいないが、低学年の方が、広い範囲に目が行き届いており（PR）、POではそれが集約されている。高学年では、PRで多方向から観察しているのが、POでは、単純化されて鮮明になっている。
- 3) 教師の中心的な観察の柱は、体力・運動能力・技能のデキル、デキナイ行動を支える条件と意欲・動機などのヤル気のアル、ナシにかかわる条件になる。そして低・高学年ともにPRより、POに貢献度が高く、高学年でデキル、デキナイ、ヤル気のアル、ナシをよく見ている。
- 4) 児童を観察するとき、主体的要因のデキル、デキナイ、ヤル気のアル、ナシを見ることによって、児童の実態を可成り鮮明に把握することが可能である。
- 5) 生活習慣に関する観察は、本調査では明確にできないが、登校前後や朝起き、病気などと結びつく観点や洞察が必要であると考えられる。

#### 注

- 1) 内山 源『健康のための生活管理』（家政教育社、1982年）、p. 32.
- 2) 高田典衛『授業としての体育』（明治図書、1972年）、p. 26.
- 3) 小林篤・宮下充正・柴若光昭『体育科教育の理論と実際』（国土社、1980年）、p. 161.
- 4) 3)と同じ。
- 5) ダリル・シーデントップ（高橋健夫他訳）『体育の教授技術』（大修館書店、1988年）、pp. 63-64.
- 6) 野田洋平「茨城県児童生徒の体位・体力・運動能力の発達とその背景の検討」『茨城大学教育学部教育研究所紀要』20号（1988年）、pp. 53-63.
- 7) 1)と同じ。